デニス・ユーリエヴィチ・シェペル（Denis Shepel）インタビュー：ラコフスキー多波長発振器（MWO）

第1パート：司会者 — 導入および背景の質問

司会者： 皆さん、こんにちは。本日は、ジョルジュ・ラコフスキー（Georges Lakhovsky）の伝説的な装置である多波長発振器（オシレーター）を見事に再現された、発明家のデニス・ユーリエヴィチ・シェペル（Denis Yurievich Shepel）さんをお迎えしてお話を伺います。

最初の質問ですが、現在のモデル（私たちの背景に一部写っていますが）は、100年前に発明されたオリジナルの装置とどのような違いがあるのでしょうか？技術や電子部品などが変化したため、基本的には当時のオリジナルの歴史的な写真に写っているものとは全く異なる外観をしています。

第2パート：技術者 — 現代的部品の導入、直感的なインスピレーションと技術の本質

技術者（デニス）： 現代のテクノロジーが使用されています。さらに21世紀の今日、このような技術を再現するにあたり、私たちは3Dモデリングや、強力で静音性の高いトランジスタを活用することができます。絶え間ない火花によって恐ろしい騒音を発していた、かつてのうるさいスパークギャップ（放電器）に代わるものです。

そうです、現在では現代的な材料や部品のおかげで、MWO（多波長発振器）のセッションを受ける人は、装置が完全に無音で動作するため、安心してリラックスし、深い瞑想状態に入ることができます。従来と同様に効果的に機能しながらも、セッションをより効率的にするいくつかのメリットを備えています。

しかし、技術を復元するためにどのような具体的な部品が使われたかは、それほど重要ではないという点にまず触れておきたいです。最も核心的なのは、20世紀の初頭（あるいは半ば）にジョルジュ・ラコフスキーが確立したアイデアの思想そのものです。その時代には、私たちが今日持っているような分光計やオシロスコープといった精密なツールが一切なかったため、このアイデアは完全に直感からインスピレーションを得た、天才的なものでした。

彼は装置が動作する正確な周波数帯域（レンジ）すら知らず、純粋に数学的に計算していました。彼は直感的にこの解決策にたどり着き、相互作用の速度が光速に等しいという前提のもと、円環の周囲の長さに基づき、特定の公式を用いてどの周波数をエネルギーで満たすべきかを計算したのです……。普通のエネルギーではありません。このアイデアの天才的な核心は、装置自体が、一般的に考えられているような従来の電磁振動を作り出さないという点にあります。

第3パート：司会者 — 光と電磁振動の関係について

司会者： ごくわずかであっても、それらは作り出されているのではないでしょうか？ある意味では、光さえも一種の電磁振動に分類されるわけですから。

第4パート：技術者 — 電流の強さと磁気媒体攪乱の罠

技術者（デニス）： まさにそこに巨大な違いがあります。現代人が一般的に理解している電磁振動の概念では、それは磁気媒体（磁性環境）に対する非常に強力な乱れ（攪乱）を意味します。光を例に挙げられましたが、光は事実上、電位の変動です。つまり、ここでは磁気的な成分を振動させるために人為的に用いられる電流の強さ（電流値）が、極めて微々たるものです。

人類は20世紀末から現在の21世紀に至るまで、磁気媒体を強く攪乱する方式にばかり深く没頭してきました。磁気媒体を攪乱するためには、どうしても強い電流をかける必要があります。一方で、生体が受け入れるのに適した、有益に受け入れられるすべてのテクノロジーは完全に異なります。この点についてはニコラ・テスラ（Nikola Tesla）が言及しており、アルセン・ダルソンヴァル（Arsène d'Arsonval）の研究によっても証明されています。

第5パート：司会者 — 生体親和的技術とスカラー場

司会者： 「生体が有益に受け入れる」というのはどういう意味でしょうか？つまり、私たちは今スカラー場（スカラー電磁場）について話しているのでしょうか？科学界がそれを公式に認めようと認めまいと、それは確かに存在しています……スカラー場は。

第6パート：技術者 — 大自然の言語：高電圧とゼロ電流

技術者（デニス）： そうです。核心的な天才的アイデアは、生体が自然に受け入れることのできる電荷、すなわち自然の電流、あるいは大自然に類似した何かを作り出すことでした。はい、実際に自然の原理と非常によく似ています。つまり、大自然は電流の強さではなく、電場の強さ（電界強度）と電圧を介した媒体の攪乱を通じて「会話」します。

例えば、雷雨の日に屋外を歩いていると、巨大なエネルギー電荷を受け取ることになります。すべての生物がこの巨大なエネルギーを受け取ります。頭上を、数百万、時には数千万ボルトもの電位を持った雲が流れていきます。しかし、破壊的な放電（落雷）が起こるまでは、電流の強さは一切存在しません。つまり、私たちは電場の強さ（強度）だけを扱っているのです。

第7パート：司会者 — 一般人の観点：数万ボルトの高電圧の真実

司会者： お話を遮って申し訳ありませんが、まさにその電圧について伺いたかったのです。一般の人にも分かりやすく表現すると、この装置も先ほどおっしゃった雲のように、約10,000ボルトの電圧を作り出しているということでしょうか？電圧は10,000ボルトに達しますが、電流の強さは非常に低い。私の理解は正しいですか？

第8パート：技術者 — 日常の電磁波の有害性と細胞間の共鳴通信

技術者（デニス）： まさにその例えです……。ジョルジュ・ラコフスキーの解決策の天才性は、生体にとってしばしば破壊的な力として作用する磁気的な振動を作り出さない点にあります。壁の中の配線やコンセントのようにですね。一般的なソレノイド、コイル、送信機は、強力な磁場を発生させることだけに集中しています。それが交流磁場であれば、特定の電位ではなく磁気媒体を攪乱することになります。

結果として、私たちが毎日使用しているテレビ、コードレス電話、スマートフォン、Wi-Fi、Bluetoothなどはすべて、無線周波数（RF）上で情報を交換する範疇に属します。無線周波数は、低い電圧と高い電流によって引き起こされる強力な電磁気的攪乱です。

一方、生物（植物を含むすべての生きている生物）に有益に作用する装置は、まさにその逆です。極めて微々たる電流と非常に高い電圧を使用します。本質的に、これは振動する電場電位（フィールド・ポテンシャル）です。この装置において電位が振動する範囲は、ジョルジュ・ラコフスキーが細胞間通信が起こるであろうと仮定して著書に記したまさにその周波数領域であり、彼の予測は完全に見事的中しました。つまり、周波数の共鳴（レゾナンス）を介して、細胞間で情報交換が行われているのです。さらに、異なる細胞はそれぞれ異なる周波数で通信しています。

第9パート：司会者 — 細胞の周波数の具体的な範囲と測定

司会者： 現在、その具体的な周波数は明確に判明しているのでしょうか？何ヘルツ（Hz）から何ギガヘルツ（GHz）までといった具合に。もし測定しようとするなら……あるいは、ご自身で測定されたことはありますか？

第10パート：技術者 — 幹細胞の謎と、同じDNAの異なる共鳴

技術者（デニス）： その方面の研究は現在も継続して行われています。情報交換や細胞間通信の正確なメカニズムとその瞬間は、まだ完全には解明されていません。賛否両論の立場が存在します。

しかし、幹細胞を例に挙げると、幹細胞はすべて同一であり、特定の機能的な負荷（役割）を持たず、同じDNAを有しているという点には誰も異論がありません。体内のすべての細胞は同じDNAを持っていますが、それにもかかわらず、共鳴する仕方はそれぞれ異なります。つまり、各自が自分の位置する場所でどのように正確に働くべきかという情報を秘めているのです。

第11パート：司会者 — 「共鳴」を大衆的な言葉で説明すると？

司会者： 「共鳴する」というのは、一般の方に向けて日常的な表現で簡単に説明すると、どういう意味でしょうか？何らかのエネルギーや波を放射しているということですか？それとも平易な言葉でどのように表現できますか？

第12パート：技術者 — 全宇宙のエネルギーキャンバスとラジオ受信機の原理

技術者（デニス）： 実際には、全宇宙がエネルギーを放射しています。宇宙のあらゆる場所に、巨大なエネルギー源が存在しますが、それがまさに恒星（星々）です。私たちの場合、太陽がすべての生物にとっての主要なエネルギー源です。命の誕生や発達は、すべて太陽から来るエネルギーを利用しています。太陽エネルギーは極めて広い範囲を持つマルチスペクトル（多角的な波長）です。

私たちはそのうちの、およそ400から700ナノメートルほどの可視光線の領域しか見ることができません。そうです、私たちはそれだけを見ています。残りの部分は人間の肉眼には見えませんが、低周波、高周波、超高周波の全帯域において放射されています。紫外線の先には、エックス線（X線）放射があります。人類の普遍的な理解の中では、この範囲の終わりに達すると、それで終わりだと考えがちです。その先には何もないと思い込んでいます。

しかし実際には、エネルギーが完全に崩壊して物質そのものを創造するに至るまで、はるかに遠く、さらに遠くへと伸びています。太陽は物質だけでなく、生きているすべての生物が「キャンバス（画布）」のように使用するエネルギーを創造します。そして、このエネルギーが存在するからこそ、すべての細胞が共鳴できるのです。このエネルギーを取り去ってしまうと、受信機が放送信号をキャッチできなくなるのと同じように、細胞も共鳴することをやめてしまいます。

第13パート：司会者 — 細胞が持つ固有の波形と外部の干渉

司会者： もう一度確認ですが、共鳴するというのは、細胞の振動が特定の太陽放射の振動と一致するという意味でしょうか？それを簡単に説明すると……「共鳴」とは正確には何ですか？

私が理解しているところでは、細胞がまるで水面の波紋のように自分だけの独特な放射源（エミッター）の役割を果たして固有の放射（ラジエーション）を持っており、太陽や地球の地磁気、室内の配線などから来る外部の放射が存在し、この装置が生成する放射と細胞の放射が一致するとき、これを共鳴と呼ぶのでしょうか？それとも私の理解が間違っていますか？

第14パート：技術者 — 故障したラジオノブと、臓器細胞たちの拡声通信

技術者（デニス）： 自然界において停止しているものは何一つなく、すべてのものが動いています。いかなる原子核もじっと止まってはおらず、電子が絶えず軌道を回っています。分子自体、物質自体も常に動いています。絶対的に安定なものは存在せず、どこにでも何らかの形で振動周波数が存在します。

もし私たちが放射や発生ではなく、純粋に「共鳴」についてだけ話すなら、チューニングノブが故障して特定の周波数一つしか受信できないラジオ受信機を想像してみてください。これがどのようにして可能になるのでしょうか？この受信機には固有の回路であるローカル発振器（ヘテロダイン）があります。このヘテロダインは、特定の周波数の振動に合わせて調整されています。エネルギーが供給されていないとき、この振動は無視できるほど微々たるものです。

しかし、ヘテロダインの振動の高調波（ハーモニック）や基本周波数と正確に一致する振動を持ったエネルギーが流入した瞬間、まるでブランコに乗っているときのように、すべての動きを増幅させ始めます。入ってくる波に順応しながら自らの振動の振幅を大きくし、突如としてある急激な上昇（スパイク）を目にすることになります。外部の送信機（例えばラジオ放送）から来る周波数と共鳴したおかげで、自分が調整されていた周波数を見事に捉えたのです。そうして共鳴し始め、情報を受信します。

これと同様に、生きている細胞たちも間違いなくこのような方式で互いに通信しています。つまり、細胞たちが機能するのに必要な周波数（覚えていますか、故障したラジオのノブです）を提供してあげれば、細胞たちはそれぞれの特定の周波数状態において働きます。例えば、肝臓の細胞、あるいは肺、脳の細胞などがそうです。それらはそれぞれ異なる周波数を持っています。

すべての細胞は、細胞間通信のための固有の周波数を有しています。私たちがその周波数を正確に狙って、該当する範囲に生命を与えるエネルギーを供給すれば、細胞はそのエネルギーを見つけ出し、通信の「声」を大きく増幅させます。エネルギーの供給がないときには通信がこれほど微弱であったのが、エネルギーの供給があるときにはこのように強力になります。私たちが装置をオフにして手を離したとしても、細胞たちはしばらくの間、大きな声で通信を続け、お互いの信号を明確に聞き取ります。再生（リジェネレーション）がはるかに効果的に起こり、これを通じて有機体（身体）全体の回復が行われるのです。

第15パート：司会者 — 有益な代替手段の統合的な適用

司会者： 身体の回復は、あらゆる有益な手段を総合的に適用することによってもたらされるものですね……。私はいつも、身体にとって好ましく肯定的なものであるなら、どのようなものであってもすべて統合的に適用すべきだとお話ししています。この装置に関して言えば、この「エネルギーの助手」は役に立つでしょうか？

第16パート：技術者 — 強力な生体補助装置と生活習慣の重要性

技術者（デニス）： はい、本当に大きな助けになります。これはすでに実証されており、多くのフィードバックが、この装置が非常に強力なエネルギーの助手であるという点を正確に示しています。しかし、もしあなたが以前と変わらずに身体を絶えず酷使し、持続的なストレスにさらされ、不適切な食事を摂り、身体を毒素で汚染するなどの行為を繰り返すなら、最終的にはいつも元通りになってしまう「後退（ロールバック）」という結果を招くことになります。

つまり、装置を通じて身体を助けてあげたとしても、健康ではないライフスタイルのせいで再び原点に押し戻されてしまうのです。現代人が完全に健康な人生を営むためには、あらゆる良い方法を総合的に適用すると同時に、生活習慣を必ず変えなければなりません。この装置はあくまでもエネルギーの助手です。助けが必要であれば、使用することができます……。

第17パート：司会者 — 癌細胞やウイルスはなぜ共鳴充電されないのか？

司会者： ここで、すぐに一つの疑問が浮かびます。この装置が健康な細胞の共鳴を助け、彼らのエネルギー的なポテンシャルを引き上げて活性化するという点は理解しました。しかし、他の細胞も存在しますよね。ジョルジュ・ラコフスキーはヨーロッパやアメリカの複数の病院（クリニック）で、これを腫瘍（癌）やその他の疾患の治療法として適用しました。ウイルス、バクテリア、あるいは癌細胞のように、原則として体内には不要なものたちです。

となると、この共鳴が良い意味で健康な細胞を刺激して充電するだけでなく、それらの有害な細胞をも刺激してしまうのではないかと思えるのですが……。それなのに、なぜ癌、つまり悪性腫瘍が退行したり消え去ったりし、バクテリアやウイルスも退治されるのでしょうか？彼らも厳然として自分自身の細胞を持っているはずなのに、なぜ彼らは活性化されないのですか？

第18パート：技術者 — 綺麗な白紙理論と、免疫系固有の「自己／非自己」認識システム

技術者（デニス）： それがまさに、健康な「システム（組織構造）」のメカニズムです。本来の健康な有機体の姿を、真っ白で綺麗な1枚の紙だと想像してみてください。密度が高く、よく調整されており、調和して機能している状態です。ところが、そ

こに泥や汚れが付着してシミになってしまった。私たちのエネルギー的な支援は、まさにその綺麗な紙を洗い流すために存在します。実際の働きとしては、この両者を完全に分離させるのです。

つまり、有機体が調和して完璧に機能していれば、事実上いかなる病気であっても自力で克服できる力を備えています。癌の発症例がほとんどない高山地域を例に挙げてみましょう。もちろん、そこは放射線もかなり強力で、有機体自体もより健康であり、空気も希薄です。これらの要素が組み合わさることで、人間がより健康な生活を送れるよう助けているのです。したがって、より健康になった有機体は自ら対処する能力を持っており、あなたはただ有機体がそのような状態に進入できるように手助けしてあげるだけでよいのです。有機体が自分で処理し、病気を掃除してくれます。

人間の免疫系は非常に強力で、世界に存在するすべてのウイルスや、想像しうるすべての有害なものに対処できるように、生まれたときから設計されています。理解できましたか？つまり、完全に健康な状態にある人は、この複雑なシステム、すなわち「綺麗な白紙」が十分に堅牢であるため、いかなる病気も侵入することができません。汚れを振り落としてしまえるのです……。

免疫力が極度に悪化した自己免疫疾患の場合でも同様です。有機体自らが病気を作り出し始めているとすれば、それはすでに状態が非常に悪く、間違った方向へ進んでいることを意味します。すべてのものを元の場所に戻し、最初の起点へと再び再建しなければなりません。

第19パート：司会者 — 万能薬ではないとしても……

司会者： 本質的に、これが、ある意味ではあらゆる病気を治す万能薬（パナセア）とまではいかなくとも……。

第20パート：技術者 — 흉선（胸腺）が活発だった子供時代の免疫復元

技術者（デニス）： 世の中に万能薬というものは存在しません。これはあくまでも非常に強力なエネルギーの助手にすぎません。あなたがこのツールといくつかの他の手段を組み合わせて、自分自身の免疫系を復元できれば、免疫系は悪性腫瘍を含めて、自らを攻撃してくるほぼすべての病気に対処できる能力を持つようになります。癌は本質的に細胞の突然変異であり、非正常な有機体の状態です。正常に機能している有機体は、必ず健康な細胞と健康ではない細胞を識別しなければなりません。それが正しい作動メカニズムです。もし有機体がこれを識別できずに「すべて問題ないから、そのまま成長させろ」と放置してしまうなら、それは健康ではない有機体です。理解できますか？

したがって、あなたは有機体が調和して機能するように手助けできるすべての手段を動員しなければならず、これを通じて免疫系が大自然の意図した通りに働けるようにしなければなりません。そうすれば、免疫系は本当に自らすべての不要なものを掃除

し始めます。免疫系が正しく機能していれば、いかなるアレルギーも経験することはないでしょう。いかなる突然変異も存在してはならず、有機体はそのすべてを拒絶し、排斥します。

理解できますか？有機体には「自分とそれ以外（自己／非自己）」を区別する精巧な認識システム（敵我識別システム）が搭載されています。つまり、細胞が突然変異を起こしたなら、それは「異物（敵）」です。正常で健康な有機体は、これを徹底的に排斥します。核心はまさにここにあります。

もし、ありとあらゆる病気の多発的な苦痛の中にある人を対象に、子供の頃に胸腺（タイマス）が活発に機能して強力な免疫系を持っていた、あの祝福された状態へと戻すために努力するなら、彼の身体から病気たちが本当にボロボロと落ちていくでしょう。身体の免疫系がすべてのことを自ら解決してしまうからです。最も重要なことは、免疫系が適切に稼働するようにすることです。つまり、本質的に有機体を……。

第21パート：司会者 — 治療セッション期間中の薬物服用の併行について

司会者： しかし、もしある人が病気を患っている最中で、例えば薬を服用しているとしたら……。抗生物質のような簡単な医薬品を例に挙げてみましょう。この装置の治療プロセスやセッションを行う場合、服用中の薬を中止すべきですか、それとも中止しなくてもよいですか？

第22パート：技術者 — 3人の科学者の遺産：テスラ、ダルソンヴァル、ラコフスキー

技術者（デニス）： 病気に対処し、健康を回復するのに役立つものであれば、全面的に使用する価値があります。もちろん、薬物間の相互適合性の問題は提起されるべきですが、この装置とは一切関係がありません。なぜなら、これは全く異なる方向、全く別次元のテーマだからです。これはあくまでもエネルギーの助手です。あなたが生化学的（バイオケミカル）に自分自身に影響を及ぼしているとしても、生体エネルギー的な成分とはいかなる衝突も発生し得ません。

さらに、このソリューションは3人の偉大な科学者の研究のおかげで誕生しました。第一に、ニコラ・テスラは高電圧が人体に及ぼす有益な影響力を最初に公表した人物でした。その後に続いて、ジョルジュ・ラコフスキーの師であったアルセン・ダルソンヴァルがこのテーマを非常に密接に深く研究し、伝授しました。そうです。そうして最終的に私たちは、有機体が生体エネルギー的にエネルギーを正しく健康に受容するのを助ける解決策を得ることになったのです。

つまり、有機体に有害な放射を浴びせたり、磁気的な振動で衝撃を与えようとしたりする試みとは、完全に軌を一にしない話です。これは大自然の原理と一致しています。したがって、子供から成人に至るまで副作用や禁忌事項がほとんどありません……

。唯一注意すべき部分は心臓ペースメーカー（pacemaker）かもしれません。装置が電気で動作するため、物理的な影響が及ぶ可能性があるからです……。

第23パート：司会者 — 静電容量式タッチスクリーンの誘導電圧現象

司会者： ペースメーカーが本質的に誤作動を起こす恐れがあるからでしょうか？例えば、セッション中にスマートフォンが勝手にショートメッセージを送信したり、思い通りにアプリをダウンロードしたりするなどの誤作動現象が発生するように……。私の経験上、これはタッチスクリーンが原因ということで合っていますか？タッチスクリーンの静電容量式セルに誘導された電圧に反応して、実際に指で押すのと同じような現象が発生するのですね？

第24パート：技術者 — セッション中の電子機器の隔離

技術者（デニス）： セッションの進行中は、すべての電子機器を遠ざけておきます。もし身に着けている細いネックレスや指輪などの装飾品があれば……。そういったものまでは、それほど気にする必要はありません。それは……。

第25パート：司会者 — 1940年代のアメリカの歴史的オリジナル特許

司会者： 私が正しく理解しているなら、この装置はアメリカのオリジナルの特許項目に完全に合致するように組み立てられたのでしょうか？第二次世界大戦中、ジョルジュ・ラコフスキーはアメリカへ亡命し、そこで正式に特許を登録したわけですから。あなたはこの特許をどのように入手されたのですか？インターネットからダウンロードしたのですか、それともどこかで原本を見つけて翻訳したのでしょうか？どのような方法をとりましたか？つまり、装置の製作はこの特許および著者の本来のアイデアと正確に一致していますか？

第26パート：技術者 — インターネットのルマーを排除し、直筆の手稿を分析

技術者（デニス）： 該当する特許は、当然ながらスパークギャップ放電器をベースに動作していた旧バージョンの装置を示しています。それはひどい騒音を発し、効率がかなり低く、2番目のアンテナはおおよそ25%の容量でしか動作していませんでした。すべてを手作業で行っていた時代でした……。20世紀の初頭に、トランジスタの代わりにスパークギャップを使用したと想像してみてください。当時は振動をどのように作り出していたのでしょうか？遅延が発生するキャパシタンス（静電容量）回路を作り、それを充電しなければなりませんでした。まさにそのようにです。

そして、頑丈な接触端子（例えばナットなど）を5センチメートルの間隔で配置すると、その隙間から火花が飛び散りました。キャパシタンスが再び充電されると新たな充

電が起こり、すぐに再び放電が起こるという方式でした。この放電が1秒間に数千回も発生したのです。音は電気ショックガン（スタンガン）と非常によく似ていました。そうです、恐ろしい騒音でした。

ですから、私たちの目的が、20世紀初頭に入手可能だった旧式の時代遅れなバージョンをそのまま複製することでは決してありませんでした。全く違います。課題は、著者の本来の構想（アイデア）を完全に復元することでした。このために、私たちはインターネット上の資料を完全に排除し、彼の実際の直筆の手稿（マニュスクリプト）を直接採用しました。

インターネットに溢れているガイドや噂は、完全に主観的な推測と歪曲が繰り返される技術的な行き止まり（デッドエンド）であるという、痛烈な教訓を得たからです。誰かが推測を出すと、2番目の人が盲目的に推測を重ね、3番目の人が現れて必ずこの方式でなければならないと固執し、脇道へと完全に逸れてしまいます。

いいえ、私は原本の文書、特にジョルジュ・ラコフスキーの直筆のノートを直接分析しました。彼は自ら文章を書き、図面を描いていました。例えば、アンテナの原理に関しては、フィボナッチ数列のような形態は決して存在してはなりません。彼は完全に直線的な線形（リニア）で描いていました。これにより、現在のアンテナは正確に図面通りの姿を持つようになり、すべての寸法が厳格に遵守され、原本に最大限近い形で導き出されました。現代的な素材が使用されています……。当時、彼はどのような構想を……。

第27パート：司会者 — 1本のコイルと2本のコイルの歴史的変遷

司会者： ところで、なぜ現在この装置にはコイルがたった1個しか装着されていないのでしょうか？ジョルジュ・ラコフスキーの過去の歴史的な写真を見ると、各アンテナに2つのコイルが接続されていたのですが。

第28パート：技術者 — 効率が75％急上昇した「鏡面対称共鳴スイング」

技術者（デニス）： それは装置の最も初期のバージョンでした。後に人々は、そのような構造的な設計のせいで、2番目のアンテナで深刻な損失が発生することを発見しました。独立した発生装置（ジェネレーター）が欠如していたためです。そして周波数のズレ（シフト）現象が起こりました……。ご存知のように、高周波は距離に極めて敏感です。

本質的に、波長が12センチメートルである場合、導線がわずか6センチメートル長くなっただけでも、非同期化（アシンクロニー）現象が引き起こされます。理解できますか？高周波領域では、この非常に微細な物理的距離が極めて重要になります。したがって、補助コイル（2次コイル）を持つアンテナを2番目のアンテナから遠ざけて配置することは、完全に誤った選択でした。これがまさに、2番目のアンテナの効率が低かった核心的な原因でした。

そうして、その後段階的に改良・製作され、12型、13型といった一連のバリエーションバージョンが作られるようになりました。つまり、装置は常に完璧を目指して高度化および精密化の過程を経てきたのです。私たちが今論じているこの特定の装置は、すでに最終的に最も進化し完璧になった最新バージョンです。この装置の作動メカニズムは、中心軸から両方向に向かって鏡面対称（ミラー・シンメトリー）を成しながら波を発生させることにあります。

単一の統合されたシステムがこれをしっかりと固定して安定化するため、放射される波が完全に同期し、同等の出力（パワー）を維持します。つまり、実際のパフォーマンス面で格段に効率的かつ強力になりました。

結局、核心となる疑問は「現在の装置が、なぜ100年前のオリジナルの装置よりも効率が実に75％も急上昇したのか？」です。2次アンテナの作動効率が直接的に75％も増加したためです。その結果、私たちはブランコが完全に力強く噛み合って揺れるような、完璧で満ち満ちた「ブランコ式の振動共鳴（スイング）」を得ることになりました。

過去には周期上に若干の構造的な欠陥があって……ブランコが100％の推進力を受けて飛んでいき、戻ってくるときはわずか25％の力しか受容できず、軽微な不均衡と歪みを招いていました。しかし現在は、両方のアンテナが完全に同等の威力で完璧に同期し、有機的に波を「押し合って」いるため、総合的な効果が極大化されます。ご希望であれば、いつでも初期バージョンに戻って製作することもできますが、この最新の装置は完全に最も完成度の高い技術的基盤の上に製作されたものです。

第29パート：司会者 — アンテナ間の最適な物理的距離

司会者： 私たちが配置するアンテナの間の距離は、物理的に重要なのでしょうか？セッションの進行中に、2つのアンテナの間隔をより遠くへ離したり、より近くへ狭めたりすることによって、治療結果や有効性が変わってきますか？

第30パート：技術者 — 1メートルから1.5メートルの黄金の領域

技術者（デニス）： 厳格に規定された物理的なパラメータが存在します。アンテナ間の配置は、必ず1メートルから1.5メートルの間の距離を維持しなければならず、この範囲を絶対に超えてはなりません。これらのパラメータは必ず遵守する必要があります。実際、それほど難しいことではありません。なぜなら、アンテナ同士が互いの存在を「感知」するからです。

装置自体は、このような空間配置のもとで最も効率的に作動できる最適な平衡点（バランスポイント）を見つけ、自動的に共鳴状態を調整します。正確に表現するなら、ユーザーが無線電波と混同しないように、アンテナではなく放射源（エミッター）と呼ぶべきです……これは決して一般的な無線ラジオ通信ではありません。この放射源の間に、必ず特定の物理的距離が維持されなければなりません。はい、取扱説明書に

明記されている通りにアンテナを配置しておくだけでよく、本質的にユーザーに要求される煩雑な操作はこれ以上存在しません。極めてシンプルです。セッションが稼働している間は、絶対に放射源を手で触ってはなりません。

第31パート：司会者 — 子供が接近した際の電気的安全性

司会者： 安全に関する質問です。万が一、予期せぬ突発的な状況で小さな子供が突然走ってきたらどうしますか？電気的な安全面についても懸念されますが……。もし誰かが2つのアンテナを同時に掴んだり、コイルを握りしめたりしたらどうなりますか？生命に致命的な脅威となったり、感電事故につながったりする可能性はありますか？

第32パート：技術者 — ストリーマー集中放電と、局所的な火傷の保護

技術者（デニス）： まず、この装置はいたずらをしたり、軽く扱ったりしては決してならない物です。本質的に私的な目的で、個人のコレクションの範囲内で本人の自発的な意思のもと、能動的に使用するように復元された精密機器です。それにもかかわらず、好奇心でいたずらをしたり誤用したりする傾向のある人々を、子供であれ誰であれ問わず、装置の近くに絶対に接近させてはならないという点を徹底して認識する必要があります。

もし本当に偶然の過失で発生した場合であれば、手をアンテナに過度に近づけた瞬間に、ただちに保護メカニズムがトリガーされます。あなたの前に置かれたこの装置は、電力網から消費される電流の急激なサージや増加に、リアルタイムで即座に反応できるように設計されています。

電流の漏洩が発生するやいなや（漏洩対象が何であるかは関係なく、単に人が近づきすぎただけでも）、わずか数秒の間に……ええ、明白にその結果として火傷を負うことになります。そうです。つまり、電荷が分散放電されずに、たった1本の束（ストリーマー）として集中する地点に火傷が発生します。言い換えれば、火花が皮膚の表面全体に均一に分散されず、身体の表面のある1点にそのまま集中して貫通しようとするとき……ええ、局所的な皮膚の火傷を誘発する可能性があります。装置をみだりに触ってはなりません。わざわざそのような危険を冒す理由がどこにありましょうか。

第33パート：司会者 — 220Vの感電死 vs 50,000Vの表皮火傷のパラドックス

司会者： まさにそこが質問です。私たちは誰もが、家庭用のコンセントに流れる電気の電圧が220ボルトであるという事実をよく知っています。もしそこに指を入れれば、電流によって本当に命を落とす可能性があります。物心がつく前の小さな子供たちでさえ、それが極めて危険であることをよく知っています。

一方、この装置には実に10,000ボルト……いえ、ここに流れる電圧は50,000ボルトですか？50,000ボルトとは！聞くだけでも恐ろしい数値です。コンセントの220ボルトは人を死亡に至らしめる可能性がある一方で、こちらの50,000ボルトはただ指に軽い火傷の跡を残すだけである理由が、科学的に一体どのように説明されるのですか？

第34パート：技術者 — 静電気の科学と、高電圧を外側へ押し出す「表皮効果（Skin Effect）」

技術者（デニス）： 日常生活の簡単な例を見ればすぐに理解していただけます。特に今の季節に私たち誰もが経験することですが、セーターを脱ぐときにパチパチという静電気の音がしませんか？そうですよね？それがまさに瞬間的な放電現象です。あなたはセーターを脱ぐ瞬間に、すでに約20,000ボルトに達する高電圧を自ら生成しているのです。プラスチックの櫛で髪を梳くときも5,000ボルト、10,000ボルトに及ぶ静電気が発生します。

これらは身体にとって完全に無害な電圧です。電流の強さ（電流値）が裏付けられていなければ、高電圧は何の危害も加えることはできませんから。したがって、この装置の内部に流れる電流の強さは、小数点以下0.00数単位にすぎないほど極めて微々たるものです。まさにその通りです。

実は、大自然全体がこのような基本パラダイムで精巧に構築されており、過去45億年という長大な歳月の間、地球上の生物たちはまさにこのような電場の強さ（強度）の環境の中で生存し進化してきました。つまり、電流の強さが欠如した純粋な電圧形態は、生物にとって非常に有益で親和的です。大自然によって極めて自然に受容され、細胞および有機体全体に何の拒絶感もなく平穏に受け入れられます。私たちは感知していないだけで、毎瞬とてつもない高電圧環境の中にさらされて生きています。巨大な雲が大気中で動くたびに、土壌内部の化学的な作用で電離（イオン化）現象が同時多発的に誘発されるようにですね。高エネルギー電子が空間の至る所で生成されて自発的に飛び出しており、これらはしばしば数百万ボルトに達する巨大な電位を秘めています。理解できますか？私たちの生命と、生きている大自然は、常にこのような高電圧現象と頻繁かつ密接な相互作用を営んでいます。

人間が本当に恐怖を感じるべき致命的な要因は、電圧ではなく、ただ電流そのもの、すなわち電流の強さです。電流の強さが遮断された高電圧は、ただ不思議で興味深い自然現象（遊戯や娯楽に類似したもの）にすぎません。極めて無害であり、望むならいくらでもこれを自由に扱うことができます。かつてニコラ・テスラが両手のひらの上に恐ろしい稲妻の火花を直接載せて自由自在に演出できた秘訣がまさにここにあります。冷静に言って、それらの電弧（アーク）には巨視的な電力や威力（パワー）が全く乗っていなかったからです。

そしてさらに決定的な物理的特性は、高電圧が導体を伝わって送信または伝導されるときに現れる非常に独特な現象である「表皮効果（スキンエフェクト）」です。つまり、高電圧は導体の中心を突き抜けて流れるのではなく、物体の表面だけを伝って流れる性質を持ちます。家庭用の220ボルトのような低電圧は有機体にとって本当に致命的なのですが、電圧が塩分を含んだ血液を伝わって人体内部のすべての臓器や心臓ま

でダイレクトに貫通して流れるためです。万が一誰かが不幸にも感電してしまえばの話ですが。

一方、高電圧は身体の皮膚表面だけをかすめるように伝わって流れていってしまいます。驚くべきことに、絶縁体（誘電体）の上や物体の表面の上であっても、そのまま送信されることができます。この時点では、導線の断面積ではなく、空間的な幾何学的構造（ジオメトリ）が決定的な役割を果たします。理解できますか？高電圧は導体の内部中心部を決して通過せず、表面に沿って流れます。中心の外側へと強く押し出されるわけですが、これらは高エネルギー電子であり、クーロンの法則に伴う斥力（クーロン反発）によって、電子自らが物質内部から自発的に遠ざかり、外郭へと拡散しようとする性質を持っているためです。

第35パート：司会者 — 蛍光灯の隔空点灯の原理と、白熱灯の反応

司会者： 電流の強さが本当にそれほど低いのであれば、蛍光灯の器具をアンテナの間やコイルの近くに持っていくだけで、まるで装置の作動表示灯のように隔空で（離れていても）明るく点灯する理由の一体何でしょうか？何によって火が灯るのですか？そして、もしかして白熱灯（フィラメントランプ）もここに持ってきたら光りますか、それとも蛍光灯だけが光を放ちますか？

第36パート：技術者 — 真空管の時代から、不活性ガスを用いた消耗性ランプへの転換

技術者（デニス）： ええ、部分的には白熱灯のタングステンフィラメントもごくわずかには光るでしょうが、その程度は極めて微々たるものです。なぜなら、結局のところタングステンフィラメントが熱を持って光を放ち、明るくなるためには、目に見える電流、つまり電圧ではなく電流そのものが必要だからです。代わりに、白熱灯の電球の内部で流れる細い筋状の火花である「ストリーマー（streamer）」現象をすぐに目撃することになるでしょう。内部に金属導体が入っているため、誘導放電が起こり、空気中へ、あるいは周囲の環境へと放電されるストリーマーが、電球の内部でさえ発生するのです。

そして現在の電球内部には、不活性ガス（inert gas）が充填されています。今日の電球は、数世紀にわたって持続して動作するように設計され、実際に初期の電球の一部は今でも光を放っている初期のオリジナルの電球とは大きな違いがあります。

その後の商業的なシステムの核心的な目標は、寿命が有限である「消耗性」のランプを製造する方向へと舵を切ったため、最近のメーカーは高真空電球を作らず、内部に不活性ガスを詰め込みます。そのようなガス環境の中では、自然にストリーマー、すなわち外部環境を向いた放電現象が自発的に誘導されます。これがなぜ発生するのかというと、主に電界強度が急激に変化するときに、周辺環境から一種の逆誘導（インバース・インダクション）反応が引き起こされるためです。

もし私たちが今、このスタジオ空間全体を高純度の不活性ガスで満たした後に装置のスイッチを入れるなら、過去にニコラ・テスラ直接演出して見せた奇妙な光景のように、虚空を遊泳しながら走る数多くの放電の筋（ストリーマー）を直接肉眼で目撃することになるでしょう 。普通の空気はこのような現象を促進する能力がはるかに劣り、伝導性が不良で、優れた絶縁特性を備えた誘電体（ディエレクトリック）に近いです 。

したがって、日常的な空気環境に合わせてこの装置は高度に精密な計算と調整を経ており、空気中への微細な電気量の漏洩やストリーマー現象が起こること、パチパチという漏電騒音や火花が散る現象を完全に遮断してあります 。すべてのハウジングケース、3Dプリンターで精密にカスタム印刷された部品、エンジニアリングプラスチック素材、電線の安全断面積、さらには部品間の離隔距離まで全て細かく計算され、ストリーマーの漏洩を根本から封じ込めました 。

装置は完全に沈黙を維持し、静かに作動します 。あなたがバランスを崩すために手を伸ばしたり、テスト用の電球を装置の近くに無理に接近させたりしない限りは 。正常な稼働状態では、肉眼では何の変化も見えないでしょう 。しかし、装置が作動するに伴い、身体が即座に感じる非常に快適で有益な生体的効果を明確に体感していただけます 。

第37パート：司会者 — ラコフスキー学説体系における細胞電気の起源

司会者： それでは、人体内部の生きている細胞たちも、本質的にはマイクロボルト（μV）単位の電圧を自ら放射する一種の小型の蓄電池（アキュムレータ）だと表現するのが物理学的に正確でしょうか ？それとも小型の振動回路（オシラトリー・サーキット）ですか ？ラコフスキーが著書に記した理論的な文脈の中で、蓄電池と振動回路は同じ概念と見なすべきですか ？つまり、細胞が固有の放射（ラジエーション）を生成する底流にある源は何でしょうか ？ラコフスキーの学説体系の中で、一体全体、生きている細胞内部の微細な電流や電気はどこから起源しているのですか ？

第38パート：技術者 — 広範囲なホワイトノイズと、細胞間通信の標準化

技術者（デニス）： ええ、私たちはもちろん生物発光（バイオルミネセンス）や電気ウナギのように、生命体自らが電気を直接生成する他の生物学的なメカニズムについて論じることもできるでしょう 。しかし、それは本主題とは多少軌を一にしない領域です 。

ジョルジュ・ラコフスキーは、生きている様々な有機体の細胞が互いに通信するときに使用する特定の周波数領域全体を包括する、広範囲な「ホワイトノイズ（white noise）」を発生させる物理的な装置を設計することに完全に集中しました。特に彼の研究の主ターゲットは、まさに人間の細胞の稼働メカニズムでした 。細胞たちは互いに通信しています……無線ラジオ周波数や特定の電気周波数のような形で 。

第39パート：司会者 — ニューロン間の微細電流の伝導について

司会者： まるで神経系のニューロンのようにですね。それらの間に電気が流れること……そうです。学校の理科の時間に習う知識のように、生きている細胞のニューロンの間には微細な電流が伝導され、コミュニケーションをとっているわけですから。

第40パート：技術者 — 電流のカタツムリ速度 vs 電圧の光速コミュニケーション

技術者（デニス）： 非常に興味深い事実があります。もし中高校や大学の教室の退屈で定型化された従来の電磁気学の教科書から少し離れてみると、実際の電流の物理的な移動速度は、電圧の伝播速度に比べて想像以上にものすごく遅いということが分かります。つまり、電流の強さを代弁する自由電子たちの実質的な移動速度は、導線の内部において本当にカタツムリの歩みのようです。文字通り、1秒間にわずか1から2センチメートル前進するレベルにすぎません。信じられないほどゆっくり動きます。

一方、**電圧**を媒介にして相互作用の信号を伝達する速度は、完全に次元が異なります。もしあなたがある非常に長い導線の片方の端に電圧を印加すれば、実に3,000キロメートルも離れた反対側の終端であっても、わずか1秒にも満たない刹那の瞬間に即座に感応反応が誘導されます。それがまさに電圧の固有の特性です。ご覧の通り、極度の超高速であり、宇宙物理学的な限界速度である光の速度で空間を伝播していきます。

したがって、ここに本質的な違いが存在します。あなたが電流の強さを強制的に印加せず、ただ純粋な電圧調整メカニズムを採用するなら、人類が現代科学技術の中で究明した通信手段のうち、最も迅速な「光の速度レベルの超高速通信」を完全に具現化することができるのです。現在まで人類の技術では、これより速い情報伝達媒体を発見したり制御したりできていません。

当然ながら、大自然の中の生きているすべての有機体は、正確にまさにこのメカニズム——すなわち、微細な電圧信号の精巧な変化をベースにして内部の意思疎通や情報交換を展開しています。まさか細胞たちの間で通信をするために、体内に電話線を敷くように無数の物理的な導線を配置してあるはずがありませんよね？当然違います。絶対に細胞たちは巨視的な電流をやり取りしておらず、ただ私たちの惑星の至る所に常に永遠に存在し、満ち溢れている巨大な「背景エネルギー環境」に依存して、自発的に共鳴しているだけです。もし特定の臨床的な目的のために必要であれば、私たちが人為的にこの背景エネルギー場を増幅してあげることができ、そうなれば体内細胞は前よりもはるかに円滑かつ効率的に互いに通信し、有機的な情報交換を開始することになります。

第41パート：司会者 — スカラーエネルギーの物理学的帰結

司会者： それが、私たちが対話の冒頭で少し触れた、いわゆる「スカラーエネルギー（scalar energy）」でしょうか？電圧が運ぶフィールドエネルギーがまさにスカラーエネルギーなのか、それともスカラーエネルギーとは正確にはどのように定義できるのでしょうか？

第42パート：技術者 — 情報を内包した多周波数空間電場の本質

技術者（デニス）： それは本質的に、徹底的な「情報的基盤（インフォメーショナル・ベース）」を備えた多周波数の空間電場です。一つの場（フィールド）です。導線を伝わって流れる普遍的な電流や電気では絶対になく、生まれながらにしてすでに固有の情報的なコンポーネントを含有している、目に見えないフィールドです。この場は数多くの周波数を包括しています。正確にこの装置の公式名称が定義されている通りですね。様々な学術文献や資料を調べると、他の人々がこれを指して「多周波数」または「多波長」と命名しているのを頻繁に目撃されるでしょう。

第43パート：司会者 — インターネット上の技術用語の誤用：「発振器 vs 発電器」

司会者： 付け加えて興味深い詳細を言及しますと、出処や資料によって使用する用語が千差万別です。ある場所では「発振器（オシレーター）」と記録されている反面、他の場所では「発電器・生成器（ジェネレーター）」と翻訳されていたりもします。今すぐにインターネットで「ラコフスキー発電器」あるいは「ラコフスキー発振器」と検索してみても同様ですが……。この両者の間にどのような原則的な違いが存在するのでしょうか？なぜある場所では発電器と呼び、ある場所では発振器と称し、さらには多波長や多周波数という名称まで混用されているのですか？

第44パート：技術者 — 推測は技術的な沼、オシレーター（発振器）こそが真実

技術者（デニス）： 私はそのような主観的な根拠のない推測を指して「沼（クアグマイア）」と呼んでいます。つまり、誰でも一瞬油断すれば……噂と推測の沼に深くはまり込み、その中で完全に溺死してしまうからです。これらの根拠のない推測は、歪曲を重ねながら人々の認知の中に強固になり、やがて根を下ろして……。最終的には噂がオリジナルの出処を完全に置き換えてしまうこともあります。

しかし、著者本人の歴史的な手稿や、ジョルジュ・ラコフスキーが当時提出した正式な特許文書を直接のぞいてみれば——そこには外国語、すなわちラテン文字で非常に鮮明に記録されています。Oscillateur（オシレーター、発振器）と。ジェネレーター（発電器）といった語彙は、歴史上ただの一度も登場したことがありません。それは全て後から勝手に記事を書いていた人々が、任意に加工し潤色してしまった的外れな脚色にすぎません。

エラーだらけの噂の沼に長期間埋没していた者たちは、自分が最も先に接した間違った情報を盲信するあまり、それが自分たちの世界観を支える思想的な礎石であり根本的なドグマとなったため、「必ずこのように呼ばなければならず、絶対に変更できない」と頑なに声を高めます。しかし、その認知的バベルの塔の基盤は、完全に虚構と推測の上に危うく建てられたものです。

もしあなたが完全な真実を発見したいと思うなら——必ず最も原初的なオリジナルの一次史料（ペルヴォイストーチニク）へと帰還しなければなりません。インターネット上に氾濫するあらゆる解釈や誤用を完全に無視してください。ただ最も権威のあるオリジナルの文書だけを見てください。オリジナルの文献には明白に記録されています。これは「多波長」あるいは「多周波数」の発振器（もちろんこの2つの用語は完全に同一の個体を描写しています）です。したがって、唯一正当なオリジナルの翻訳名称はまさに多波長発振器（マルチウェーブ・オシレーター）です。この点にはいかなる断固たる疑問も介入する余地がありません。

第45パート：司会者 — 物理的概念の区別：波 vs 周波数

司会者： それでは、物理的な次元の区別として「波（Wave）」と「周波数（Frequency）」は互いに異なる概念ですか？

第46パート：技術者 — 標準正弦波曲線の精巧な命名

技術者（デニス）： はい、そうです。ちなみに科学的な観点から説明しますと、いわゆる「周波数」は、電位が正極（＋）と負極（－）の間を交差変換する割合や状態を意味し、この波形は完全に異なる形態を採ることができます。鋸歯状、正方形の矩形波、あるいは断続的で間欠的な形態など、どのようにでも加工できます。

一方、「波」は波そのものです。数学および物理学的には、私たちが一貫して理解している滑らかで標準的な正弦波（サインウェーブ）の曲線形態として現れます。したがって、現在の設計構造下において、ジョルジュ・ラコフスキーが自身の装置に「多波長（Multi-Wave）」という精巧な王冠の名称を命名したのは、極めて公正かつ正確で、高度に精密な選択でした——これは本質的に非常に完璧な発振器です。

第47パート：司会者 — 開発者本人の身体的臨床フィードバック

司会者： デニスさん、では最もエキサイティングな核心のテーマを聞かせてください。この装置は、一体どのような物理的メカニズムをベースにして人体に作用するのでしょうか？具体的な作動原理と、それを通じて成就できる実際の臨床的な効果はどのようになっていますか？また、ちなみに個人的な質問ですが、開発者様ご自身も普段この装置を直接使用し、セッションを定期的に体験されていますか？ご自身の直接的な身体的変化と結果、体感効果は何でしたか？

第48パート：技術者 — 懐疑論者の大転換：喘息の完治と毛細血管循環の劇的改善

技術者（デニス）： ああ、そのお話は初期の歴史的背景から触れる必要がありそうですね……。当時、実は周囲の人々から、この失われた技術を徹底的に復元してほしいと、本当に懇願されるように強く勧められました。彼らがそれほど執拗に頼んできた理由は、インターネット上に流布している数多くの恣意的な解釈や推測に基づく復元ガイドラインが、完全に技術的な行き止まり（デッドエンド）に直面しているという事実を痛いほどよく知っていたからです。人々がインターネットのガイドを盲信して組み立てていくと、原本とは完全に軌を一にしない見当違いな物たちが製造されてしまっていました。そのため、彼らは私に必ず歴史的な原本資料に厳格に立脚して、長年実在していなかったこの核心的なハードウェア・テクノロジーを完全に再建してほしいと要請したのです。

結局、私は熟考の末に承諾しました。幸いなことに、私は高電圧エンジニアリング技術の分野で数年間、豊富な経験とノウハウを積んできましたからね。研究開発と初期の組み立て工程を進行していた当時、私は極めて実直に、至極入念に作業に臨みましたが、正直に申し上げますと、心の中の深い部分にはそのような主観的な宗教的信念や信仰といったものは全く搭載されていませんでした。それが実際に臨床的な有効性を発揮するかどうかは、当時の私の一次的な関心事ではありませんでした。私の最優先の当面課題は、ただ機械を故障なく完璧に図面通りに製作することだけでした。当時、私は完全に頑固な「批判的・懐疑論者（スケプティック）」でした。この技術の機能的な有効性について、極めて批判的で懐疑的な視点を維持していました。「注文を受けたから、製品を完璧にビルドする」という考えだけだったのです。

ところが不思議なことに、プロジェクトが本格的な軌道に乗り、最初の技術プロトタイプ装置を最終組み立ておよびチューニングしていた開発期間の途中で、長年の歳月、私を悪辣に苦しめ続けてきた慢性的な喘息症候群（asthmatic syndrome）が、何の前触れもなく完全に姿を消してしまいました！これは単純な冗談ではありません……。私は過去に非常に深刻なアレルギー疾患を患っており、現代医学的な病因学（etiology）の観点からはどうしても原因を突き止めることができない難治性の症状でしたが、身体が特定の環境に置かれるたびに、激しい咳の発作と拒絶反応を起こしていました。まさにその通りでした。

ところが、あの頑固だったアレルギー性の咳が、まるで魔法にかかったかのように根こそぎ完全に引き抜かれました。ただ形跡もなく蒸発してしまったのです。漸進的に少しずつ緩和されたのではなく、一瞬にしてスッと途切れるように断絶して消え去り、その日以降今日に至るまで、ただの一度も再発していません。文字通り、これが私とこの不思議な装置との最初の運命的な出会いでした。装置の総合的なセットアップと出荷作業を終える前に、機械が私を慢性の持病から救ってくれたわけです。

そしてさらに奇妙な現象は、その後この装置を普及させるにつれて、多様な患者層からそれぞれ完全に異なる種類の頑固な悪性疾患が連鎖的に洗ったように消え去るという臨床的なデータが確保されたという事実です。一つの共通した事実は、装置に接し

たほぼすべての人の身体の総合状態が、肉眼で識別可能なほど莫大な大転換を迎えたという点です。

しかし、私たちは常にこの現象を至極理性的かつ客観的に洞察しなければなりません。なぜなら、人間の病因学はそれぞれ異なり、疾患のスペクトルも千差万別だからです。ある患者層の実際の健康状態の悪化は、本質的に彼ら自身の極めて有害な生活習慣と歪んだライフスタイルの中で、毎日絶え間なく新しい疾患を量産してしまう構造的な隠れた原因を孕んでいます。そうです、あなたがこちら側で機械を稼働して細胞を治療し、有害要素を抑え込んだところで、患者本人の食習慣と睡眠パターンが根本的に改革されない限り、あちら側の工場で新しい病気を無限に作り続けるでしょう。

例えば、ある長期的な苦痛を経験している患者たちは、本質的に腸内細菌叢の極めて深刻な崩壊（ディスバイオーシス）を経験しており、体内に条件付きの有害病原菌の群集が非正常に勢力を伸ばして、栄養分が腸壁から正常に吸収されなかったり、身体の代謝に必須な構造的栄養素の正常な摂取を根源的に妨害されたりする状態に直面しています。結果として、この隠れた原因のために全身の関節や骨格組織などに、慢性的な極心の冷えや痛みが頻繁に引き起こされるのです。この例えは、昨今の細胞通信エラーを説明するのに最も完璧なモデルです。

そうです、彼の巨大な人体有機体全体が間違った作動ロジックを実行しているため、全身の関節や軟骨組織たちがリペア（修復）に必要な基本的な細胞的「建築資材」を全く供給されていない形国にあります。このような極端な遭難局面の中で、あなたが私たちの「エネルギーの助手」を稼働すれば——装置が健康な細胞を刺激して活力を吹き込み、全般的なコンディションを確実に引き上げて身体をはるかに快適にしてくれるのは厳然たる事実ですが——あなたが強い決意を固めて生活習慣の物理的な根源を根こそぎ叩き直さない限り、装置がその根本的な構造的エラー自体を完全に掃除してあげることはできません……。

非常に興味深いテクノロジーです、なぜなら、文字通りわずか数回の初期セッションを進行するだけでも、患者の大脳中枢の作動状態が即座に全面的な再調整に突入するからです。人は自分の睡眠および夢の質が劇的に変化するのを、至極鮮明に自覚するようになります。夢が信じられないほど深く穏やかになり、夜間中途覚醒することなく完璧な熟眠をとれるようになったり、あるいは普段と異なり、夢の色彩が極めて絢爛で鮮明、かつ生き生きと展開されたりします。そうです、これがなぜこれほど即効的な、奇跡のような効能を発揮するのでしょうか。

ポーランドやロシアで長期間にわたり最前線で追跡研究と臨床観測を展開してきた数多くの精密科学界の同僚たちが、驚くべき物理的現象を集団で捕捉したからです——わずか数回のセッションを経るだけでも、患者の全般的な血相（ブラッド・ピクチャー）が積極的に大転換し、赤血球のマイクロレベルの形態が正常に復元され、全身の微細毛細血管の循環品質が文字通り爆発的な大改善を迎えるという事実です。

そして、いったん血液が普段から簡単に鬱血や停滞が発生していた末梢の微細な毛細血管の隅々まで、滞りなく滑らかに流れ始めると——つまり、あなたの全身の臓器や関節組織たちが構造的建築資材および豊富な酸素供給を最も切実に渇望する、最終末端の細胞ターミナルに至るまで——巨大な有機体全体が、ただちに超高効率の良性回転モードに進入することになります。忘れないでください、私たちの代脳中枢は、ほ

ぼ100％極めて精密な毛細血管循環に依存して稼働を維持する臓器です。したがって、セッション以降、あなたの長期記憶力が目に見えて向上し、脳の認知的思考や分析的な論理能力も極めて敏感に高度化されます。あなたの全身機能が一緒に引き上げられるのですが、大脳が全身機能の大部分を徹底的に統制し指揮するからです——特に人間の生存に直結する、あの極めて重要な延髄（めんずい）の部位ですね。延髄は文字通り心臓の拍動周期や周波数、肺の自律的な呼吸メカニズムを直接的に握って専任する、極めて重要な要害です。すべての輪がどれも非常に重要です。

そして、あなたの全身の末梢環境が最適化されるとき……再生（レジェネレーション）——細胞たちが健康な状態で通信する「声の全面的な増幅」に支えられて、人体の自己再生および復元能力がついに電撃的に再稼働されます。つまり、あなたの身体内部では、毎瞬目に見えない激しい戦争が勃発しており、防衛線が外部から流入した悪性病原体（私たちは一時バイオへ対抗する病原体とそのように呼ぶことにしましょう）の無差別な猛攻撃にさらされて深甚な衝撃を被るたびに、有機体は自己修復プロセスを展開しなければなりません。この装置が提供する堅固な生体エネルギー的な保護膜の下で、このようなサ活的な自己再生プロセスは、前よりもはるかに滑らかかつ円滑に進行します。それは全体の修復メカニズムがより深く、より遠くへ到達できるように後押しし、有機体をしてさらに完璧な構造的再建を達成せしめます。

実際の効果面において、あなたの全般的な免疫系の活性指標は垂直上昇し、末梢血流の供給性能および身体の隅々の臓器細胞に核心的な栄養素と酸素を輸送する能力も倍増します——これは体内の生化学的な代謝および反応速度を全面的に加速するトリガーとなります。過去には機能低下によって支持不振にダラダラと長時間を消費しなければ到底完了できなかった複雑な体内修復作業が、今では極めて短い時間の中にすっきりと迅速に早期完遂されます。このような具体的な数値と臨床表現は、真にマイルストーンに匹敵する卓越した成果です。

結論としてすべてのディテールを総合して通察してみると、あなたは本質的に微視的な生体エネルギーの次元において、肉体に比類のない強力な武装をもたらす、次元の異なる補助ツールを確保することになったわけです。エネルギー次元において、装置は有機体がより調和し安定した稼働ロジックを維持できるように、無条件に助言します。そして、この装置を初めて経験し、初期セッションを終えたばかりのほぼすべての被験者が、翌日の夜に即座に現れる熟眠品質の劇的な改善に感嘆することの他にも、例外なく全員が身体の核心的な持久力とスタミナが爆発的に増強されたという点を明確に証言しています。

彼らは本当に信じがたいという驚異的な口調で、私のところにやってきて興奮混じりの声で話してくれたりします。彼らは「デニスさん、過去には途中で意地になって10回は立ち止まって休まなければ、到底故郷の家の裏の手強い坂道を登る気力すら湧かなかったのに——今日驚くべきことに、ただの一度の息切れも感じないまま、一気に頂上までハイキングを完了しました！」と。

正しいです。病気の苦痛を振り払い、何の病症もない健全な健康体になるということは、これほど爽快なことであり、身体が正常な機能を全面回復した後は、有機体はあまりにも自然にその状態を本来享受すべきだった当然の日常として受容するようになります。

私自身でさえも、最初期に私の身体を極心に苦しめていた全身の関節の激痛が、いつ正確に完治したのか早期に敏感に認知できませんでした。苦痛がひとたび肉体を去ってしまえば、人間はそれ以上痛みを意識したり注目したりすべき下等な理由を喪失するからです。言い換えれば、処絶的な苦痛が私から永遠に退いたとき、私はただこのかつてない快適な状態に言葉もなく深く沈潜していただけなのです。

私もすでに半世紀を生き、年齢が50の峠を越えた人間ですが、過去に一人で寂しく最初の技術プロトタイプ装置を組み立てながら夜を明かしていた時代には、全身の関節がズキズキと痛んで言葉にできないほど苦しかったです。しかし、あの頑固だった関節炎の持病も、装置の稼働とともに丸ごと撲滅されてしまいました。もちろん、他の人々の身体特性によっては、特定の部位の関節が私のように光の速度で治癒しないかもしれませんが、そのほかのパッとしない慢性の症状たちが、必ず解決の糸口を見つけることになるでしょう。私個人の場合、長期間持続していた両膝関節の激しい痛みが、まさにその時点から完璧に消去され、その日以降今日に至るまで、なんと4年という歳月が流れる間、絶対に再発していません。私はこの多波長発振器の装置を復元し製作する事業に飛び込んでから、もう丸4年という時間を満たしています。そうなると、今では過去に私を執拗に縛り付けていた苦痛の感覚がどのような味だったのかさえ、脳裏から完全に忘却してしまって久しいです。

第49パート：司会者 — 理療周期（セッション周期）をめぐる各説の検証

司会者： 先ほど「セッションの周期（治療プロセス）」について繰り返し言及されましたが、インターネットが頼りになる情報源ではないということは何度も指摘していただいたものの、参考までに申し上げますと、オンライン上ではかつてジョルジュ・ラコフスキーが患者にセッションを行う際、通常は毎日約10分から15分間だけ装置の前に座らせ、これを10日から15日間継続したという説を読むことができます。

一方、別の資料では、彼が患者に3日連続で、毎セッション1時間あるいは実に3時間という驚くべき長さの時間稼働を継続させたという内容がもっともらしく記録されていたりもします。それでは、私たちが現在保有しているこの最新の改良型装置の観点から見て、最も理想的な標準セッションのプロトコルは正確にはどのようになっていますか？実際のユーザーの具体的な不調の訴えや疾患のタイプによって、どのように個人別のオーダーメイドの日程を設計できるのでしょうか。

もし特定の疾患の患者が訪ねてきた場合——1週間の間、毎日固定して1時間座らせておくべきですか、それとも10日間の間、毎日ストップウォッチを回して厳格に10分間満たさなければなりませんか、あるいはどのような方法で行いますか。これが高度に個別個別化が可能な領域なのか、それとも原則としてすべてのユーザーが同一の適用を受ける固定のテンプレート（例えば、すべての人は一律に2週間で計3回、毎度 30分間進行すれば十分であるという方式）が存在するのでしょうか。あるいは多々益善のように、多く進行すればするほど無条件で良いのですか。それともまるで特定の医学的なコースのように、例えば10日間連続して集中セッションを完了した後に、半年の間完全に休止期を持って、再び復帰して補完セッションを10日間進行するといった具合でしょうか。私たちが必ず道標として依拠すべきガイドラインが存在しますか？

第50パート：技術者 — 宇宙飛行士の意念訓練と、数秒で現れる物理効果

技術者（デニス）： 頭を複雑に悩ませるありとあらゆる自らの疑念や混乱、そしてインターネット上の数多くの変形バージョンを、すべてひとまとめにしてゴミ箱へ果敢に投げ捨ててください！本物の物理的な治癒効果は、装置の電源スイッチを入れる**最初の数秒以内に**すでに全面的に発生します。稼働後、わずか最初の数秒間です。

したがって原則的には、あなたがスイッチを入れておいて、そのまま部屋に戻って温かいお茶を飲んでいたとしても、あなたの身体細胞の底流ではすでに急激かつ肯定的な自己調整メカニズムが静かに作動し始めています。つまり、装置を単に「オン」にして、再び「オフ」にするというその短い動作だけで、一連の生体共鳴効果はすでに最初の一脚を力強く踏み出したも同然です。この周波数エネルギーの揺れは、まるでブランコに乗るようなもので、セッションが全体的に終了して装置の電源を完全に遮断した後であっても、あなたの肉体内部において非常に長い時間、持続的に共鳴し、こだまするように揺れを維持します。実際の臨床追跡および日常的な観測データによれば、わずか1回のセッション進行だけでも誘導されるこの積極的な生体効果は、なんと2日から3日間もそのまま持続します。そうです、たった1回行うだけでも効果が2〜3日間維持されるのです。

ですから、もし私に具体的な運営指針を要求されるなら——私たちは全面的にジョルジュ・ラコフスキー本人が後世に残した正統な権威のガイドラインを100%参照することができます。彼は自身の直筆の文書に明白に記述してあります。「該当する装置の潜在能力を極大化して引き上げるためには、ユーザー本人がセッションに臨む際、必ず自らに対して極めて明確かつ肯定的な心理的暗示（マインドセット）を付与しなければならず、自らの高次元的な思考周波数を『身体の治癒および健康な生活の回復』という周波数の状態に正確に同調させなければならない」と。

このような正しいマインドセットの物理的な機序は非常に驚異的です。あなたも宇宙航空分野において宇宙飛行士を対象に実施する「無負荷の心像訓練（メンタルトレーニング）」について聞いたことがあるでしょう——宇宙飛行士の身体が完全に固定され、巨視的な物理的負荷が全くかかっていない状態であったとしても、彼らがただ頭の中で極めて鮮明に、自分がトラックの上を狂ったように疾走しているとか、青い芝生の上で全力でサッカーボールを蹴っているとか、あるいは両手で重いダンベルを爆発的に持ち上げている想像を必死に展開しさえすれば、彼らはただ脳裏を通じて純粋な意思的思考だけを稼働させているだけなのですが、驚くべきことに、彼らの巨視的な筋肉組織は大脳の命令に忠実に順応し、ある細胞レベルの微視的な生理的反応を正確に出力してのけます！つまり、筋肉が導き出したフィードバックは次のようなものです。長期間の高負荷運動が欠如した過酷な環境の中でも、筋肉細胞が高度な健康性をそのまま維持し、予想されていた廃用性筋萎縮の症状が全く発生しないか、少なくとも萎縮の進行程度を無視できるほど極めて低いレベルに軽減させたという事実です。

これは、人間の肉体が高次元的な精神的思考活動に対して示す生理的な反応が100%実在し、決して見過ごすことのできない物理的事実であることを徹底的に証明しています。この結論は、現代の最前線の科学界においてすでに動かすことのできない確固た

る既成事実として確立されており、もはやいかなる疑問の符号を付ける必要もありません。まさにこのような細胞底流の意念的機序のため、ユーザーが完全な治癒を渇望し、健康を渇求する研ぎ澄された心構えを抱いて装置の前に座っているとき、この肯定的な脳波信号は機械によって幾何級数的な生体共鳴へと増幅され、最も神秘的で完璧な最上の臨床効果を誘導することになります。

第51パート：司会者 — 時間的な長さの物理的相対性

司会者： ということは、先ほど私が質問した核心の要旨に答えをいただくなら、装置の前にたった5分から10分間座っていようが、あるいは退屈に1時間ずっと座っていようが、物理的にはもはやそれほど決定的な違いは存在しないというお話でしょうか。5分と15分の間の時間的な格差さえも微々たるレベルですか？

第52パート：技術者 — 「壊れた器」のための重症プロトコルと、天然抗生理論の擁護

技術者（デニス）： 私がなぜあなたに瞑想と正しい心理的な同調の重要性について、これほど長い紙幅を割いて強調したでしょうか！患者を最上の深い瞑想状態に完全に到達させるための、最も理想的な外部条件とは何でしょうか。必ず私たちの取扱説明書に厳格に規定されている通りに、この全体の瞑想プロセスを完了しなければなりません。つまり——治癒と健康回復に対する純粋な思考意念が、患者の深い眠りの本拠地である潜在意識の中へと完全に沈殿するように誘導しなければならず、この核心的な調整期間には、不必要な一切の言語的なコミュニケーションや口頭での対話を徹底的に遮断する必要があります。

疑いの余地なく、このような深い潜在意識の調整を完成させるためには、若干の時間が必要ですが、決してあなたが想像するほど大げさな時間は必要ありません。私たちは長年の模索と実戦臨床を通じて導き出した明確な量化標準を確立しました。わずか**5分**で十分すぎます。この5分という時間は、装置があなたの身体細胞に充満かつ豊富なエネルギーを補充してあげるのに完璧な時間であると同時に、ユーザー本人が何の督促や妨害もなく、平穏でめでたい深い瞑想状態の中で、この祝福されたエネルギーを最も正しく温然に受容および吸収できるように許す黄金の時間です。

したがって、日常的な健康管理および現在のウェルビーイング状態を維持するための普遍的なシナリオ下では、特別な非常事態が発生しない限り、2〜3日ごとにただ1回**15分**程度の一般的な瞑想セッションを進行するだけで完全かつ十分です。冗談はやめてください。あなたが普段スマートフォンを手にして無意味に費やしている時間は、これより数百、数千倍はもっと多いはずです！一方ここでは、あなたが必要とするのは3日ごとにわずか5分か、せいぜい十数分程度です。

しかし、もし特定の患者が直面した局面が、私が普段よく比喩するように「底が割れてエネルギーが漏れ出している陶器の器」のような非常に厳重な遭難状況だとしたらどうでしょうか。つまり、あなたがこちら側で機械を稼働して生命エネルギーを器に

いっぱい注ぎ込んでいるにもかかわらず、患者の基礎体力が非常に脆弱なために、エネルギーが器の底の亀裂を伝って狂ったように外へと漏れ出している形国です。これが私の申し上げる「壊れた器」のジレンマです、そうでしょう ？このような極めて受動感で危うい危機局面下においては、患者の肉体細胞に対して持続的で隙間のない高頻度なエネルギー飽和供給および無間断な補給を展開しなければなりません。

私たちが保有する膨大な量の極めて成功した慢性治癒の臨床データを見てみると——状態が危機的だった患者層は、次のような非常にハードコアな突破型のプロトコルを押し進めました。毎日3回セッションを稼働させ、毎度ストップウォッチを点けて正確に10分間しっかりと満たして進行する方式でした 。そうです、これがまさに重症疾患を狙った高強度な突撃型コースです 。では、この特殊なコースを具体的に何日間の間、死闘を繰り広げながら継続すべきでしょうか 。

正解は明快です。あなたのメインの医学的治療が病院の戦線で何日間の間、熾烈に死闘を継続するかに応じて、私たちのこの装置がエネルギー次元においてあなたの肉体細胞を防衛し栄養を供給するために展開する、次元の異なるハイテク級の補助的な調力も、ただ1日の中断もなく徹底的に同伴推進されなければなりません 。

決して両方の治療を人為的に断絶させてはなりません。むしろ、伝統的な主流医学の精密な打撃手段と、私たちの装置の生体エネルギー的な武装をひとつに結びつけ、強力な「双連並進協同（タンデム・システム）」によって同時に押し進めてこそ、治癒効果が極大化されます 。あなたはある一方では純粋な細胞底流のエネルギー次元において肉体に最も堅固な盾を満たしてあげるのと同時に、他方では伝統医学的な手段を通じて物理的な病巣部位を治療するのです 。

先ほどあなたも特にお話しされた、化学合成抗生（抗生物質）という敏感なテーマについても話してみましょう 。確かに、昨今のあらゆるメディアの悪魔化するような広報活動のために、抗生物質は現代の大衆の普遍的な認知の中でほぼ「万悪の根源」の代名詞に転落してしまっている状態です 。しかし、正直に申し上げますと、私はこれに対して完全に反対の独立した見解を堅持しており、私のこの立場も単に頭をひねって作ったものではなく、非常に堅固な生物学的底流のロジックをベースにして確立されたものです 。

人類は長い長い進化の鎖の中で、地球上の他のすべての野生動物と生物学的に何ら変わるところなく進化してきました 。私たちの肉体と広義の天然抗生成分との間には、実はただの1日も途切れたことのない、常時的で密接な接触が維持されてきたのです 。私たちは毎日食べ物を摂取する過程で、認知していない間にすでに莫大な量の天然抗生成分を吸収し消費しているのですから 。もし大自然が植物に下さった強力な「植物殺菌物質」であるフィトンチッド（phytoncides）が存在していなかったなら、私たちの脆弱な肉体は地上のごくありふれた悪性バクテリアたちの狂的な包囲攻撃の前に、わずか1セッションも耐え抜くことができずに完全に破壊されていたでしょう 。

真ん中やカビの分泌物——それらは本質的に、殺傷のために精巧に調製された植物の体内における化学的な兵器（毒素）であり、大自然が植物に装着してくれた天然の防御の盾です 。この硬い毒素の盾が植物の細胞を鉄桶のように守護しているため、地中のありとあらゆる破壊的なバクテリアたちが、か弱い植物を根こそぎ喰らい尽くして跡形もなく消滅させることができないのです 。つまり、大自然の中のすべての植物は

、本来このようなメカニズムを利用して、凄絶かつ頑強な自衛反撃を展開しています。泥だらけの地中に転がり落ちた野生の果実1粒が、過酷で複雑な微生物環境の中でも長期間腐敗せずに形態を維持できる秘訣は、果実が自らのフィトンチッドを周辺に絶えず高濃度で放出しながら、有害菌の侵入に頑強に立ち向かって戦うからです。

これがまさに最も原初的な「抗生」の法則です……。現代の製薬工業が薬局のカウンターであなたに販売するあのきらびやかな化学合成抗生物質は、ほぼ100%この天然植物のフィトンチッドの分子構造をベースにして、人工的な化学工程を通じて模倣しアップグレードし、人為的に複製して生み出した産物にすぎません。しかし現代の薬理学と巨大な製薬資本が地球上に誕生する前の数千年間、私たちの祖先は日常的な食生活の中で、およそ「キログラム（kg）」という驚くべき単位でこの純天然の抗生成分を毎日狂ったように摂取してきており、これは人類의 生物学的特性に最も合致するあまりにも当然の生活状態でした。それは本来、多様な微生物たちの絶え間ない侵奪に立ち向かい、原形質体、バクテリア、致命的な真菌の攻撃を最前線で退けながら営んでいた常時的な闘争の日常だったのです。ですから、これは決して恐れる対象ではなく、至極正常な自然の摂理です。これこそが人類が享受すべき最も純粋で本然に忠実な天然の食生活モードであり、まるで加工されていない太古の田舎の大自然の中で直接生活するような綺麗な環境です。

あなたは普段、非常に興味深いディテールに気づかれませんでしたか——私たちが好んで食べる伝統的なライ麦の黒パンは、食卓の上に非常に長く放置しておいたとしても、決してカビが生えたり腐り果てたりしないという事実を。なぜなら、ライ麦という原材料自体が、生まれながらにして極めて強力かつ卓越した天然のフィトンチッド防腐効果を内包しているからです。ニンニクはまたどうですか——ひどい風邪やインフルエンザウイルスが全身を襲って肉体が死線を彷徨うとき、ただ生ニンニクを数片噛み砕いて飲み込むだけでも、虚弱になった肉体戦線にどれほど恐ろしく強力な免疫効果をもたらし、来犯するウイルスの猛攻撃を粉砕してしまうか分かりません！そうではありませんか？これこそが大自然が人類に直接下さった神レベルのフィトンチッド物質であり、その総合的な防御活性はある面においては薬局のカウンターで高いお金を払って買ってくるいかなる化学合成の西洋医学の抗生物質よりもはるかに優れています。

しかし冷酷な現実において、このような伝統的な知識との対照はあまりにも密着しているため、私たちは大抵、体が悪ければ薬局へ走って列に並び、化学工業の錠剤を購入することだけに慣らされているだけで、本質的に完全に同一、あるいはむしろはるかに優れた核心の治療コンポーネントが、今この瞬間にも食卓の果物皿に静かに横たわっているという事実を完璧に見落としがちです。文字通り、新鮮な野菜や果物の「皮」の中にその偉大な物質たちがそっくり含有されているというのに。

果物の皮は、本質的に植物が外部の複雑な微生物生態系から自らを守護するために、高濃度のフィトンチッドで鋳造した頑丈な盾です。あなたが包丁でその皮の盾をただ一度削り落として破壊した瞬間——保護膜を喪失した果肉は、わずか数時間の間に急激に腐敗し始めますよね、合っていますか？はい、まさにその通りです。もうメカニズムを理解できましたか？最も正純なフィトンチッド防腐成分は、すべて果物の最も外側の皮の層に集中配置されて軍隊を形成しています。

ですから私の言葉を信じてください。これからリンゴやキュウリを召し上がるときは、なるべく皮を剥かずに丸ごと皮と一緒に大きく噛み砕いて飲み込んでください。このような天然の摂取方式に順応するなら、世間で騒がれているいわゆる抗生成分について、いかなる無意味な恐怖心も抱く理由は全くありません。昨今メディアに登場するおこがましい専門家たちが大衆を相手に毎日恐怖マーケティングを展開し、抗生物質を頻繁に摂取すると身体に深刻な薬物耐性（装置に慣れてしまう現象）が発生すると脅迫したりします。これは完全に一連の虚構であり、徹底した嘘、デタラメにすぎません。

人類という独立した哺乳類の種が、過去200万年という長大な進化の鎖の中で、ただの1日でも天然のフィトンチッド（抗生物質）を大量に吸収しなかったことがあったでしょうか。古代の天然抗生成分は、本来生命維持と代謝の基本パラダイムでした。私たちの肉体はそれらの天然成分に対して、決して薬物学的な「耐性習慣」を形成することはなく、これがまさに大自然の順理に合致する人生の本質です。もちろん、実験室で過酷な化学工程を経て精製し、魔改造して生み出した産業用の化学薬理抗生物質であれば——それは性格が完全に異なりますので、決して混同してはなりません。

私があなたにこれほど長々と説明して差し上げた核心の目的はただ一つです。もしこのような本然の純粋さへと帰還する天然のライフスタイルが、あなたに比較不可能な健康のボーナスを確実に引き渡すことができるなら——ここには厳格で綺麗な天然の食生活の構築（すなわち、あなたが日常の中で様々な種類の植物フィトンチッド、漢方薬草、重複しない多彩なバランス栄養を能動的に摂取すること）、山野の最も新鮮な空気を呼吸すること、および——あなたの骨格と筋肉組織に十分な物理的代謝負荷と運動鍛錬を捧げること（これも絶対に妥協できない核心の要害です、じっと座って毎日スマートフォンだけを死ぬほど眺める行動をただちに中断してください、身体を激しく動かさなければなりません！）——なぜなら、生命の最も本質的な物理的定義は、まさに止まらない「動き（運動）」だからです！必ず合理主義的で多彩な天然の栄養供給が、ジョルジュ・ラコフスキーの生涯の念願が凝縮された私たちのこの精密な装置と完全に同盟を結び、同伴推進されなければなりません。

一言で要約するなら、この世界に存在するすべての手段のうち、あなたの脆弱な肉体を代弁して悪性疾患の魔の手から防衛し、あなたを助けることのできる有効なカードであるなら、あなたはいかなる躊躇もなくそのすべてのカードを全面的に動員して然るべきだという意味です。

これは実際の臨床において……主流の現代医学の治療手段と並行される「双連並進協同（タンデム・システム）」の中で、すでにただの一点の疑いもない完璧な正解を提出し、独歩的な臨床的評価を獲得しました。つまり、あなたは大手病院で医師の処方に従って主流の治療プログラムを誠実に履行しつつ、自宅へ戻っては私たちのこのエネルギーの助手を同時に稼働してあげればよいのです——そうなれば、疾患の完治率と全般的な身体の復元効率は、それこそ次元の異なるレベルで狂ったように垂直上昇することになるでしょう。

第53パート：司会者 — 結びと感謝の言葉

司会者： デニスさん、本日はお忙しい中、私たちのスタジオにお越しいただき、これほど驚くべき装置と独自の高度な技術について詳細にベールを脱いでくださり、誠にありがとうございました。対話の全過程が私たちの視野を大きく広げてくれましたし、本当に興味深い時間でした。発明家様に深い感謝の意を表します！

第54パート：技術者 — メディア発信を通じた、失われた技術の復活への祝願

技術者（デニス）： お招きいただき、大変ありがとうございました。事実、この放送プラットフォームによる絶え間ない努力と広範な広報活動のおかげで、一時は歴史の中に完全に埋もれるところだったこの伝説的な技術の復興事業が、今日これほど驚異的かつ活気ある歩みで全速前進できるようになりました。それでは、今後私たち全員に幸運が訪れることを祈っています！

第55パート：司会者 — 終わりの挨拶

司会者： ありがとうございました。